

原発対策委員会新聞

民主党福島県
連合原発対策
委員会・

発行責任者
小川右善

第50回護憲沖縄大会 差別・分断・蹂躪の歴史



国家権力の犯罪

十一月三〜五日、沖縄県・那覇市に於いて第五十回護憲大会が開かれた。

一日目の開会式、二日目分散会、三日目閉会式に、沖縄県内及び全国から延べ二〇〇〇人が参加した。

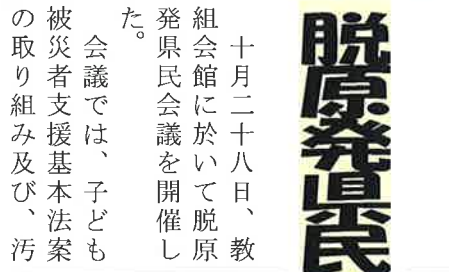


平和憲法が最大の危機を迎えている今日、沖縄で節目ある大会を開く意義は大きい。大会は、沖縄開



催の意義を共有すること。二、侵略や支配の歴史から平和国家を目指すしてきたこと。三、安倍内閣の超危険な改憲の動きを許さないこと。そして、福島原発事故は、沖縄の基地問題と同様に、国策のなかで引き起こされる人権侵害、一人ひとりの命をないがしろにする国家権力

の犯罪と位置づけた。参加者感想― 沖縄は始めてであった。観るがままに感じれば良いとの心境で参加したが、あまりの無学に恥じるばかりだった。大会の間を利用して平和記念公園・ひめゆりの塔、首里城などを見学した。地上戦で多くの犠牲者を出したこと。戦後は長く米の占領下に置かれたこと、沖縄返還は名ばかりで、日米の戦略基地におかれていること。など、一貫して国家の捨石、犠牲を強いられてきた。フクシマも沖縄と同じだと言われている。



るが、慟哭や悲しみ、差別と憎しみ、焦燥感と諦め、対立と蹂躪、理不尽さと怒りなど、その深さや重さはフクシマの比ではない。戦後六十七年間辛酸を舐め味わいつづけてきた歴史が、軽々に同じであるとの表現はできない。奪われた土地を戦

の濃淡・避難区域内・外、そして賠償など、政府の支援施策が原因している。もとより、格差社会の上で醸成された分断・支配の構造である。しかし、分断・対立のなかに、共通する

十月二十八日、教組会館に於いて脱原発県民会議を開催した。会議では、子ども被災者支援基本法案の取り組み及び、汚染水問題など、県要請行動を確認した。また十二月議会対策として原発廃炉未採択自治体の調査をはかることとした。脱原発県民会議は、

闘機が飛び交う暮らしは、紙一重の安全を意味している。仮にフクシマが同じとすればこれからののだろうか。否、現に経験している今の積み重ねなのか。懺悔と負い目を背負ったひとときであるとともに改めて護憲・脱原発の誓いをした。(佐藤記)

「ゆるい」の濃淡・避難区域内・外、そして賠償など、政府の支援施策が原因している。もとより、格差社会の上で醸成された分断・支配の構造である。しかし、分断・対立のなかに、共通する



県平和フォーラム及び社民党県連、プルサーマル反対双葉地方住民会議で構成し、原発事故以前のプルサーマル導入動向時期につくられた組織である。原発事故後の被害の大きさは、以前の役割を遥かに超えて、県民の受け皿になるべき組織として期待されている。

ることも生じている。被災者が異句同様に漏らす「原発さえなければ」「元の生活に戻せ」「もう原発はたくさんだ」の声は共通している。そして、加害者である東京電力と国の責任も共通している。